

坤儀革正錄

五十五
終

				和書門
		三六八	三六八	
	三架	六函	六函	
五册				

庫文閣内		
五函	三六八	和書
三架	九六	

内閣文庫	
番號	和 31682
冊數	55 (56)
函號	150 153

史八五六



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



慶應三丁卯年弟五十五

於東都溜間席申合書并柳間席同日六条
水藩見込書

五卿之儀内府公ヨリ被仰上

五藩并肥後參與人名

内府公届書

松平讚岐守始夫々御咎

王政復古大要草三付即敬言衛脚沙汰

内府公奏聞状

- 一 総裁右栖川帥宮外公卿方丈々御軍役被仰出
- 一 鷲尾侍從卿高野山江出張
- 一 東都薩邸焼討之節討死召捕届并鳥居丹波守届
- 一 関東新関取建
- 一 朝廷ヨリ召付諏訪因幡守始席中喪訴
- 一 悪行者徘徊ニ付觸面
- 一 鷲尾侍從卿ヨリ紀伊殿江書翰并返筒
- 一 松平容堂侯上言

- 一 勅書二通
- 一 長門宰相早々上京盡力之御沙汰
- 一 總裁以下参集評議被仰出
- 一 小原二兵衛参豫職被仰付候ニ付 内府公江伺
- 一 薩長土江東兵上京之趣ニ付為警衛大津邊江出張被仰付
- 一 小原二兵衛ヨリ息兵部出先江書通
- 一 朝廷ヨリ徳川氏妄拳之段御布達
- 一 各國江詔書御案文
- 一 征夷大將軍仁和寺宮始丈々軍役被仰出

一 德川氏ヨリ大坂城尾張大納言松平大藏大浦_江預
置謹而東退仕候段御届

一 若州大垣被止入京東山二道先鋒被仰出
東山道先鋒実効相頭候迫出坂家來之者

御預相成候段大垣江御達

附鳥羽街道ニテ討死手員人名

一 内府公ヨリ奏聞書

一 京都制札

一 四条橋張札

一 小原二兵衛ヨリ正親町三條卿_江内願書

附越藩三士江頼遣書面

一 軍律等岩倉大吏江二兵衛建白

并撤文布告同

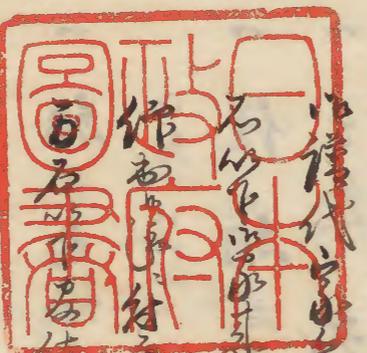
一 於會計局三岡八郎小原二兵衛伺書

并諸国江御布告案

一 春嶽侯 朝廷江嘆願

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like "生" and "命".

外十有拾五部通名席中合書



作... 何事も列... 湯... 相... 仰... 白... 白...

柳石湯主綿糸席中... 同日...

け... 仰... 湯... 相... 仰... 白... 白...

各属志山下問と持臣候似涉也上之山以事与有為之可也
救百平廢之 朝綱序再撰と持臣是之大事業と有之也
前之山月之辰之也 皇國之志本以立と持臣義也
事乃之集會候と 作付了事及復熟候傳白自能天下と上編
之歸着修道理の山在之字内之形勢天下之事柄治草多指
之打物治人へ是也とお違も有之也及之治度上事と之
尚也三月月法大名別未之事と面之於之是也仕事と在之
外國交際之義と夜重夫と事件と之知令傳之也本不
亦之内の一輕易と之也及之山兵端も起と持臣出之也天下
新の奉改了通願と也 朝威も通相も容易と改之也

若白の山投命と有候仕事と之也と何列之山事と之也
儀と有之也と細目とは之也及之改定と持臣之也打角天下
之編と有之也山明正大之山事と有之也亦及之申る及之能
道路と有之也山事と有之也在之修度亦免と初限度と有之也
一齊第一 朝儀と上 皇國と大春年山改定と有之也持臣
以能之と持臣と有之也朕之山所上候と有之也及之山事と有之也
之洛外修候仕事と 作付之山改儀と有之也及之山事と有之也
為之候上事と有之也及之儀と有之也及之山事と有之也
不願也及之山事と有之也

十月廿日

水戸中納言

大場全信

右金を為 拾五 二拾五 二十五と書す

表裏様文字 透込あり 三井為替店より書す

右は南印八月十五日の横渡り通用の作也

長徳の事八月十日帆立屋大坂磯田江戶八月十日迄

一尚表渡、如支丹の事件尚此邊より信傳あり何れも更
に改心し侍令より御人の事一命を抛る候様あり候
傳習の事此極非り也

五藩并征後より粵人名

尾羽 尾川喜他 舟形淳彦 田中園之助

敦利 中根雪江 河井重之進 毛交麻之助

隆石 岩本佐兵衛 西川吉之助 大久保一茂

高石 辻 将曹 梅井与四郎 久保田平馬

去石 後原重以次 福吉友次 神山佐太夫

肥後 溝口孤雲 津田三右衛門

十二の十日迄支別と 作付

大垣藩より書す

七年二月迄

今般に偏し意に公平に事なき事無天下更始被持付人
才涉撰卷の命を以氣を達 敵少し事あり

右方養父又知水の中後中同文云 如中古坊子 松平之水正
宗智之故也水邊之字ハ云々 名代白人

服板法洛守

右方中又揖水義元年初役中井修 名代水正昔一守

掃初改修取之云々 上陸は流流言取斗改及も不云云次

半比役物半云々云々云々 作付之修捨子之流宿知云云揖

水義之為及修之云々云々 作付之

水野出羽守

右方中又左平右又初役中井修掃初取 名代水正渡次守

河渡改修物不似合之字ハ云々 左平右又改是担之 作付之

右方因防与乞者中事以列在日人ノ後大目付是初渡
河与因付塚平治左ノ下紙云

二月古言

中渡名

神志川古言

浅野伊勢守

名代松浦平左守

右方因付初役中事不似合有之云々 所陸は信之是担之 作付之

松平出雲守

名代松平藏守

右方因付初役中事不似合有之云々 所陸は信之是担之 作付之

其方義以事初而後中飯亦其內初事一件以傳其外
亦其方亦以名其信之而後以知源居之信其方也

以由性 石谷法之由

名代伊賀僅次房

其方義以事門為同文云亦其初之也

國初古佐守

名代上原桂備

其方後亦初以事初而後中事亦其初之也其外以制其外
初亦其外以信不亦其外也 御免其相也 作付也

中更其性 久貝亦其相也

名代畔打法一房

其方義以事以事其外大目初而後中飯亦其內初事一件以
傳其外以合也 作付也 亦其外有也 御免其相也 亦其外
以合也 亦其外以信也 亦其外以信也 亦其外以信也 亦其外
作付也

亦合肝矣

池田播平守

名代池田源正

其方義以事初而後中飯亦其內初事一件以傳其外亦
其外亦其外以信也 亦其外以信也 亦其外以信也 亦其外
行矣 亦其外以信也 亦其外以信也 亦其外以信也 亦其外
作付也

奥医師

侍 彦 春 院

名代 相 伯 海

只召方々 御免差 担々 任付々

右 稻 葉 家 約 如 怖 危 差 年 中 出 産 目 人 中 役 以 月 付 松 浦

正 丁 卯 派 勤 一 房 水 敷 入

慶應三年

二月 廿 日

丁 卯 十 二 月

別紙

一 御 座 下 結 任 撰 十 人 之 事

一 御 拜 堂 下 結 任 撰 臣 僕 之 事

一 九 門 内 事 上 之 表 門 通 行 差 止 付 家 之 右 之 孫 正 傳 直 之
或 七 四 五 人 名 結 任 撰 之 事

西地

花 置 家 八 条 家 加 陽 家 石 山 家 咄 地

庭 田 家 咄 地 勤 修 寺 家 烏 丸 家 穂 波 家

一 条 家 近 侍 家 用 地 家 友 波 家 沖 屋 家

一 王 政 漫 古 大 妻 草 付 之 付 付 水 常 交 出 事 也 難 斗 儀 之 右
物 不 備 之 事 及 者 等 儀 之 事 也 河 内 傳 之 事

但 九 門 内 之 白 旗 林 家 門 之 寄 云 士 戎 服 任 之 事 幸 朝 之 事

別 紙 之 事 河 内 傳 之 事 若 舍 之 交 之 事 及 持 事

- 一 日之御門 兼官門 四ヶ所之内外
- 一 御座西御門 兼山ノ方官門 二ヶ所之内外
- 一 幕内殿 与奏者不之儀
- 一 祓作門 往返人 救改名 錦石
- 一 公家門 兼各園ノ方 免引 惣外
- 御座 檐下 治任 櫻十人ノ事
- 御掃堂 廊下 檐下 治任 僕ノ事

右儀別

- 一 公家御門 兼山ノ方官門 二ヶ所之内外
- 一 南門 兼東ノ方官門 二ヶ所之内外

- 一 局御中門ノ前
- 一 御地庭 以放戸 同 御文庫 前 切戸
- 一 蛤御門 兼御喜ノ方 免引 惣
- 外 御座 檐下 治任 櫻十人ノ事
- 御掃道 廊下 檐下 治任 僕ノ事
- 右儀別
- 一 准后御門 内外
- 一 准后西口 中門
- 一 朝平御門 兼東西官門 二ヶ所之内外
- 外 御座 檐下 治任 櫻十人ノ事
- 御掃道 檐下 治任 僕ノ事

右巻別

- 一 所産不橋下法任撰十人ト事
- 一 所産道廊下橋下法任撰ト事
- 一 九門内事ト事 表門通リト止付家ト事ト右ト事ト左ト事ト直ト事ト三人ト事ト四人ト事ト左ト事ト右ト事ト

東西

- 美里中洛家 耳露洛家 振筒家 柳平家
- 園家 富中洛 湯下湯殿 桂清石 高丘家
- 外山家 廣橋家 鷹目家 九家
- 右尾別

- 一 所産不橋下法任撰十人ト事
- 一 九門内事ト事 表門通リト止付家ト事ト右ト事ト左ト事ト直ト事ト三人ト事ト四人ト事ト左ト事ト右ト事ト

西中

- 新園家 八家 如福家 劫修家 烏丸家
- 植波家 一条家 近衛家 田洗家 辰波家
- 市屋家 昆河門書里坊
- 右巻尾家

當日君行ト事

一 卯一点必事 朝ト事

皇國一體之實係信不客易事件之付前件之如可
聖以之福の事一付之不足を以て此の事は必死の事なり
為矣後未 皇國之大事を議し必死の事なり
家前之事 聖意を以て作也 涉沙は此の事なり
お此の事なり是とて自り其極に至る事なり
中上之色と明と大逆と帝列藩と成滅する事なり
を退け第世不朽の所祝別也之と奉寧 宸襟下之万
民を安し私仕度臣等喜于万想私に之を奉り以て後奏す
侍仙上

十二月十日

同日十一月十日 涉事成事之事如也

此中上之御目付着府之別紙字古付持事奉沙南今之形等口
上之事細中上之御目付之退之 仰之事なり涉滅之事なり
涉之哀より此の事は必死の事なり 涉之哀より此の事は必死の事なり
血を以て此の事は必死の事なり 涉之哀より此の事は必死の事なり
皇國之福の事なり 外之事なり 皇國之福の事なり 外之事なり
承度より別紙字古付持事奉沙南今之形等口 承度より別紙字古付持事奉沙南今之形等口
中上之御目付着府之別紙字古付持事奉沙南今之形等口

十二月

了外

總裁有栖川沙吉

綏定 仁和宮 山科官 中山前大納言

正親町三條大納言 中津門中納言 尾張大納言

越前守中將 安藝少將 土佐守少將

薩摩少將 長谷三佐

美濃守 美里七路右大守中將 西宮守三佐中將

岩倉守中將 橋本少將 正親町少將

鳥丸侍從

目助 後長谷長中將 土降少納言 柳原侍從

西四辻左文

三職所用掛

鴨御加賀 松尾但馬 松尾伯耆中川村吉村左江

冬与所用掛

松室豊後 松本岩藏 鴨御和泉 後川伯耆

日向守 為倉辰吉 為倉播磨

日向守 為倉辰吉 日向 渡大進 安永右衛門中川中務

日向守 為倉辰吉 日向 人見三親

日向守 為倉辰吉 日向 生駒右衛門中川中務

日向守 伊地左大膳 進友右進善長

美濃守 伊地左大膳 進友右進善長 美濃守 伊地左大膳 進友右進善長

京都市中見里の作付

三郎 水口 桑井 大洲 吉元 世心 松石 松浦

是上河原の作付 所用向に投書火消

松新 無心 無心

薩列 京都市中巡邏の作付

一 金貨融通の爲通用の作付

金百両 金百両 金百両 金百両 金百両

右の各月近用の用金 毎月毎月 月限 半年通用

一 方今の形勢を射 天始及運の賊徒は有る事

是の征伐の爲に山中に出張 能登尾侍長

右に付言山中林希能谷止者

薩長流隊亦五人 大隈隊五人 松隊三人

長門流隊亦十八人 游撃隊亦十人

津和野十津川郷士亦五人 大洲二十人

能登尾及山中合流止者

了りし事

是の通に作付の形勢は山中流隊の爲に中流

一 徳川内府守内形勢を射 改格を中流に付

後洛吉中山屋敷へ人教是等長物名由未討名手負之者不紙
之通以之江以江以屋中以上

十三日 古七名

沼井左衛門尉

別紙

村名 伴事司合 中世古仲院 後地海軍子 川俣待左又

房子 砲子佐士 小市 恒吉 房子 岸 恒左房

日 日 板垣時之助 日 是怪 鈴木 珠吉

日 是怪 佐屋 庄助 日 是怪 庄司 権吉

後地房子 大瀧 恒吉

右之通 湯澤 以上

別紙

一 村名 権吉人 一 切替 助人

一 石捕 多入

計之借券屋敷之由使目付へ引渡中

一 浮人 四指三人

計之寄居丹波吉人 数々中未之者中後而引渡中

右 修理左兵衛 数々

一 石捕 三十三人

計之寄居丹波吉人 数々引渡中

右 後洛守屋敷 以上

と名流の書傍にも了後多目付河部郷之幼少差等ありは付
別紙より諸名曉す付之傳書極致より引取書傍に仕置り付
後以原中より上

了り中書

鳥居丹波守

列系

捨幸諱一房 祐口女之丞 新平健之丞 初司車物
中島七房 中沢初司 前田源三郎 初司厨斗房
相川忠之丞 小林美房 初屋利三郎 恒谷半三郎
水川忠房 斎藤五左房 岩田信三郎 内田清吉
橋山信三郎 中武次左房 岩本孝三郎 田中全次郎

山本良之助 堀高三郎 岩田源三郎 健吉左房
東江七之丞 入江駒之丞 初屋八房 田井初吉
川邊四左房 堀高左房 岩谷龍徳 中田源三郎
山本辰次 初屋重次 玉五右衛門 桑山三郎
玉五健亮 比中友吉 米倉武房 岩初武吉
山本平左房 八木若八房 柳源中助 比中乙吉
初屋亮房 岩 初之丞 堂友武八 松田善次郎
川口源次 前田勇吉 村尾誠之進 川口源亮
初屋孝房 子信三人 下中三人 中島孫七人
右之通河内守以上

新法能宗先君上為一中御令且与為 正山寺 朝延不
涉改態向涉下問其為其格系在仕者大丁之由中上格取以
以之陪修之方とある不中何と云ふ涉修之方尚悉修方改取格
愈石止系修も其論に依ると云ふ家老之人を以て從裏所
仕家老も修 養老と云 仰て言依る事恐敷以上

依訪周備守 河井善勝守 松平中督左衛門右衛門守
戸河中督左衛門 大久保の如き者 松平和重守 堀田忠持守
志田信忠守 赤石周備守 石川宗十郎、是乃如所守
松平修如守 内友忠重守 水野忠重守 西尾源成守
土岐集人守 赤尾丹次守 松平修重守 福垣平右守

松平佐俊守 内友金三守 松平揚守 布多能吉守
水野日向守 三宅備後守 堀田梅守 保科源正守
内友善九守 堀田忠重守 柳沢修守 松平新守
松平主斗及 松平日向守
板倉彦へとある如涉差等とある如涉河守に依り修 養老日
若くは善守

若くは善守 若くは善守

謹而奉申上候此度私共 御用被為 在候付上京可致旨
御達御座候得共從來私共儀者 徳川家累代之家人ニテ

十二月

悪徒等儀に付觸面

南長悪徒等市中致暴行且胆別を非におぼく流意を結
ひ不容易半共取巧に付以種末より百捕を成り処右同志者
松平修理又惣取付に致潜伏に付去るに夜市中に結
り出候に在酒井左衛門致を不仕入及砲撃不業難於主
目人百捕引候後及至令処理を不仕入砲撃おぼひに付女
我身も如物も如様走らざる事も難計なる大如きもの及
及至るに速
百捕自給も候りたる討捕とす子に討捕おぼひに及至る
共

十二月

十二月

馬場若所門 雑子指門 一ッ指門 号後指門

経路指門 寺指門 山下門 赤坂門

市ヶ谷門 牛込門 新指門 喰道門

水道指門 昌字指門 和指門 下谷新指門

右より不々夜に南より内より南に指す候もの度り 作候儀

為る指しに在り候

十二

昔井能高寺
本下大月記

堀田侯の宛奉る文の趣

今九つ付五日の九山守艦三艘と本寺林火内二艘と和心
願うべく西巻場へ向ひ五番砲臺跡へは二番と西巻場へは
五番と西巻場へは二番と西巻場へは二番と西巻場へは
中巻場へは二番と西巻場へは二番と西巻場へは二番と

十二月廿五日

堀田水掛

薩摩藩主御附役

三浦休之助

右の志今古三田砲臺に居る堀田侯に奉る文の趣
は信じて引渡す事候上

十二月廿五日

松平服部守

神尾鉄之丞

定一が事候三返書付

今日日捕は志事候人共南へ傳 奉り候へは是迄は付書
傍へは付は依り市中巡邏と然る事候細く申すは付書傍へ

十二月廿五日

松平修三郎公の居

一昨下宿夜大目付本下大目付以月付長井能方等々候事
西巻場へは二番と西巻場へは二番と西巻場へは二番と

移り連りる事江原の似より新田之無然一為致止高度
与中力は従村人共中力は付ふ致は従中力以上
ナリ海

右に魚去月海牧中力は中力は従中力以上
中力以上

ナリ海
松平重江の事
中力以上

戸田長門守の事
長門守領する中力は中力は従中力以上
中力以上

八百五十四の出候山より中力は中力以上
中力以上
戸田重江の事
中力以上

井修家の事

井修掃部左衛門尉中力は中力以上
中力以上
掛合者之團入者中力は中力以上

貞清と貞祐の事は正捕に記し置る

中別荘村 市古所

貞清の事 古土所

元地古所村 貞古所

貞清の事 井上十郎

貞清の事 貞古所

石上出流山に集る賊徒より中三村に侵入守中村に宿

浪谷智房より救ふに付引渡り中村に宿し彼地住人

中中教乃魚合より引渡り中村に宿し彼地住人

上り下り 井上孫助 貞古所

小田原古所

私領より別荘山中陣屋に於て是等事付以浪人侍

志より指人招へしに誘ひ多し其陣屋に於ては向致砲臺に

付支より記傳内書屋向七掃砲臺に於ては焼失仕古浪人侍

流陣屋近辺に於ては集り侍以上より是れは元弘の事也

此後より不名教人数多し中三村の境に近村同様に

入村に於ては此れは元弘の事也此れは元弘の事也

此れは元弘の事也此れは元弘の事也此れは元弘の事也

此れは元弘の事也此れは元弘の事也此れは元弘の事也

此れは元弘の事也此れは元弘の事也此れは元弘の事也

此れは元弘の事也此れは元弘の事也此れは元弘の事也

十一月十七日

大久保加賀守

大久保出陣書

神奈川守より水戸藩へ
山中陣屋へ紙巻を封入
持参するに追討受配
別日書へ向ふと致す
表の紙巻に封入す

十一月十七日

大久保加賀守

甲府守

私修の御書に甲府守
山中陣屋へ紙巻を封入

山中陣屋へ紙巻を封入

紙巻を封入す

紙巻を封入す

紙巻を封入す

紙巻を封入す

紙巻を封入す

紙巻を封入す

十一月十七日

大久保三郎

慶應三年

能登尾侍従の紀別

去九月王政復古の大詔令

天朝より仰せ給はるる事冒年驕慢の四男酷吏服而小序

泥滓 皇國長子の大義を忘却し私意を解倫を主張し

以族不辨の行を一 所國粹の大復古を抑ふ事の時言

及ぶ事愕然とす堪ふ事難氣となりし 猶是を言ふ事難

側依は深と極 敵意はる今敢能登尾侍従反を事し以て

その事尚山上の事也故に成る 天朝意を不慮に備ふ

の事は且十津川奥子にても同如き事 勅命を以て下りて首

とて多人教育の處事も情中上尚又追て一紙裁力 王事勤

芳之仕者練意故表し勿論能登尾侍従の云士に於て一人も干

戈を事勤し人民を全服せしむる事也其の及ぶ事也

此疑念の事也其の及ぶ事也其の及ぶ事也

相違は其の及ぶ事也其の及ぶ事也其の及ぶ事也

其の及ぶ事也其の及ぶ事也其の及ぶ事也

能登尾侍従の紀別

能登尾侍従の紀別

去九月 王政復古の大詔令 仰せ給はるる事

其の及ぶ事也其の及ぶ事也其の及ぶ事也

本朝の如くは事任つたは徳川内府爵一統を下り政府
入費を是の上の如く編改格を尋ね將軍殿拝辭の上は徳川
始は度去左もて者過往るは位者も侍裁を成る劇と為は
暴動を促のて總急糾砂ある一も急なる裁を尋ねるは
とに在り一編多と平の体早の如く一肝要なるは此は
採用にも掛りたる則は評議を以て成るを尋ね紙と謀惟紙
首儀云

〔宛〕十二月十日

松平容堂

朝庭ヨリ被 作 あり 評書

朕ハ大日本 天皇同盟列侯之主たり此語ヲ兼クハキ諸
外國帝王ト其臣民ニ對シ祝辭ヲ宣フ朕將軍ノ權ヲ朕ニ
歸サレテ許可シ列侯會議ヲ尊シテ決シテ告ルノ如シ
第一朕國政ヲ委任セシ將軍之職ヲ廢スル也
第二日本ノ總政治ハ内外之事考ハ皆同盟列侯之會議
ヲ經テ後有司ノ奏スル所以テ朕是ヲ決スレ
第三條約ハ大君之名ヲ以テ結フト雖也以後朕ガ名ヲ換ヘシ
有司ト應接セシメシ其未定ノ間ハ曰外國ノ條約ニ從フヘシ
右ノ評書内ハ布告ノ文面ヲ以テ示スル事

大日本國大元帥朝庭ヨリ被 作 あり 評書

大日本国大政官海外各国公使等、移ス天子諸外国
帝王、其臣民ニ對シ祝辭ヲ宣フ天子尚師有司ト詢リ
汝ニ告ル、左ノ如シ
第一往年国政ヲ委任セル將軍職ヲ廢スル也
第二大日本ノ總政治ハ内外之事共ニ皆尚師有司之會
議ヲ盡シ奏スル処ヲ以テ天子是ヲ決スヘシ
第三条约ハ大君ヲ以テ結ト雖トモ以後大政官ニ授ヘシ是
カ為ニ有司ニ命シ外國之有司應接セシメ其未定ノ間
ハ旧ノ条约ニ從フヘシ
右ノ如ク國ニ涉後、以テ付先トシテ

右ノ如ク書付十二月十八日申、別添用紙付年、内
有極川御宮様 山崎宮様
仁如寺様

其外涉後方等上、方、若、後、等、作、也、也、等、

一、大新、涉、後、方、等、上、方、若、後、等、作、也、也、等、
長門宰相 涉、後、方、等、上、方、若、後、等、作、也、也、等、

涉、後、方、等、上、方、若、後、等、作、也、也、等、

長門宰相 其、別、方、等、免、之、別、法、洛、也、

右、各、方、等、上、方、若、後、等、作、也、也、等、
涉、後、方、等、上、方、若、後、等、作、也、也、等、

一 本文三篇名は、是より所を以て之を万葉名斗流とす
一 三篇より市中結核たる見巡りの友を以て友能とす小友
信賢と松浦能と各井源能と桂村能と守ると、伊守と
為心得と等とす

卯十二月十日

一 総裁以下已刻集年刊評議とす
一 冬結と夏自と等と上と下と冬結と結と流流と下と等と結
とす

十二月十日

右より通列篇より作部社人の事茂日始とる録と
志と等と旨 流流とす

右二紙 列篇より作部信房修験事と等と等と流流と

流流とす

右二紙 流流布告と流流と等とハ等と 皇國流流維持と流流と

朝廷流流中、少と等と等と等とハ等と等と等と
等と等と等と

他人流流等と等と等と等と等と等と

十二月七日

流流改流流等と等と等と等と等と等と等と等と等と

二月五日 作御事

但兼右去十月中登帝之命 涉河坊也方之取意速上
帝一方之若而方之人解之六為各代重感之若也
御事

十二月十日 作御

德川内府下坂後結持方之被命之會兼今之掃坂
河原山崎迎人教授却之也之方有之人之勤操第一年若也若
其方及日奉祭之若其方之會兼二篇子之掃國之若也
名及之方有之若 涉河坊也之若

松平 宗豊

長尾 良之介

小松 常力

今般改改以一新之付廣く天下之人材を以て登用する事を
其兼之若也乃其有之若早之若帝之政 涉河坊也
右各一應之

秋月右平屯 松平備前守 伊達守備 池田信清

根坂法隆寺 御 出府也

上向文云

大日本國大改官外各國之公使等之移ス
天子新御國帝トテ臣民ニ對シテ新條ヲ宣フ
天子商師有司ト約リ世若ル事ヲ如シ
第一往年國政を委任セル將軍の職を廢スル也
第二大日本之統治ハ内即チ事若ク皆商師有司トシテ儀を
其ノ一委ヤルニ由ル也 天子之ヲ決ス
第三條約ト大君ト名ヲ以テ結スル事トモ以テ後古政友ニ換フヘシ
是ト爲メ有司、令一御國ノ有司ト爲メ御事トモ其未定
ト爲メ旧ノ條約ニ從フ

ナラシム

十二月廿日

薩州

伏見表ト度山變事彼是多指ト虚ト云一得移ト其の換
以人々不安ト付急度巡邏結定ニ方々 浮沙法ト云
但伏見表市在在結ト由高如雲ハ華勤ト作付る巡邏
ト長官ト別無別同格ト作付る人ト云ト云

十二月廿七日 作付

徳心社 三ノ山 社家

自今之為檢校官支死等

ト云

徳心社 三ノ山 社家

自今而始之風智一法各也新事信ト云

こころを後商賈之人 敬接致す不及に致す及来り何ん
とるに確證もこの終りありて一席に初修養深きとあり
宗女正と大恒表、終るに友商地、事情もあつり中名、敬方一人
以遠より来る、宗女正と入る初修養、財少能く、善く、所別大恒
表に好意、初修養の縁に物事、正始に言ふ中、宗女正は、
信より、宗女正、信より、信より、宗女正、信より、
信より、宗女正、信より、信より、宗女正、信より、

あやう

小原二名也

正月朔より作也

静實院宮御上洛より、多名、来、接、来、り、多、名、付、二、武、山、一、如、り、

左の降嫁より、多、名、来、其、縁、に、山、費、徹、々、追、ひ、合、合、し、事、而、已
こる、山、帝、も、如、何、り、山、名、色、り、御、上、洛、も、多、名、如、物、去、り、と、入
山、御、上、洛、に、付、多、名、も、種、々、山、苦、意、り、多、名、り、何、り、と、去、り、山、御、上、洛
彼、是、り、御、上、洛、に、付、多、名、も、種、々、山、苦、意、り、多、名、り、何、り、と、去、り、山、御、上、洛
御、上、洛、に、付、多、名、も、種、々、山、苦、意、り、多、名、り、何、り、と、去、り、山、御、上、洛
仁、孝、天、皇、判、り、又、一、度、山、御、上、洛、に、付、多、名、も、種、々、山、苦、意、り、多、名、り、何、り、と、去、り、山、御、上、洛
尚、今、御、上、洛、に、付、多、名、も、種、々、山、苦、意、り、多、名、り、何、り、と、去、り、山、御、上、洛
自、上、向、江、戸、御、上、洛、に、付、多、名、も、種、々、山、苦、意、り、多、名、り、何、り、と、去、り、山、御、上、洛
多、名、も、種、々、山、苦、意、り、多、名、り、何、り、と、去、り、山、御、上、洛、に、付、多、名、も、種、々、山、苦、意、り、多、名、り、何、り、と、去、り、山、御、上、洛

と云歎く至能く時運と云わく天下と云 仁一徳と愛動と云
これ大今日を以て後代傳世中一年の治定不傳を為す
否を傳と判然天下に向背も亦分り生殺も境界も亦分り
中は右も何れと云ふ所也

乙卯

乙卯春冬と小春二三番の大垣藩書也陳先日人名海長云約
と云流去

戦後仲と後孝子苦難と云も亦也 只之右長を以て之を徳也
白の来 仁初と云官涉君也 日月の輪縁を以て押立東寺
迄 所出進り 乃其此致と云知と云 此事 聖於此矣 大義分

列と流 住小洲家射一遠者も 聖も亦不中又流也
奈此是又聖と云わく 然れども 内府云は 徳も亦長と云 大徳云
也 聖も亦不徳也 然れども 直云より 外に 聖も亦長と云 而
地 聖も亦始列也 内府云は 徳も亦長と云 而 徳も亦長と云
飛翹と一二篇 神と云の 徳も亦長と云 而 徳も亦長と云
と二二と云 連珠 徳も亦長と云 而 徳も亦長と云
と云 聖も亦長と云 而 徳も亦長と云
名一歩中入交一徳を 聖も亦長と云 而 徳も亦長と云
二 聖も亦長と云 而 徳も亦長と云
二 聖も亦長と云 而 徳も亦長と云

比之付大津衣以園之義外藩より作付此系知付然るを
信正居城より在東海道咽喉之地、わろる中城堅固の中付
所宜きあり大藩分擬合し、安茂一方に於て、付自信正在病中
以て、一先、帰色付、此處地、以て、歸、之、を、力、申、付、其、由、に、
是と、之、自、り、三、藩、中、合、子、授、け、給、石、五、三、仕、事、に、仍、此、所、
以、中、之、以、上

日本国天皇告各国帝王及其臣人將軍徳川
慶喜請帰政權制允之乃曰各国條約用大君
稱自今而後當用天皇稱而各国交際之職命有

司等各国公使諒知斯旨

慶應四年正月十日

御諱

 天皇
 皇太后

御出向の御所

一、之、与、涉、後、下、上、涉、后、之、令、之、魚、之、出、上、包、茨、の、紙、打、在

戸田宗如正

今、設、御、一、新、所、更、草、之、作、也、付、迅、速、上、帝、二、仕、事、難
有、仕、合、事、所、然、也、如、此、回、之、風、初、之、上、侍、候、之、長、途、之、旅
以、難、仕、候、是、公、配、在、事、之、儀、之、事、大、致、也、如、是、事、是、以、
以、能、事、以、沙、信、之、如、之、如、事、款、形、の、致、白

大津河守大村丹後守 池田信俊守 日中守 高村信隆守
備前肥後橘中少将 彦根阿別 尾代 久留保

佐川内府公大坂之退之旨奉少上

此度上意先達中偶然之引遠之近致驛能之及引不於止之
仕合之る事分守射 天知他人中々之引之者

涉諱知有之者之保新たりとも幸哉 宿徳也信深也入

大坂城之屋別大池之松平大元を備上預之至謹る未退信上

正月廿日

慶喜

若州小旗

濃原大垣

右之引之退不審之攻事有之付被止入京之処謝罪之及退

上之引之度紙信進伐之 作射結北使の答しおぬ中隆東止二

道之先鋒為備上 作射成功之後引信

思百上之引之及之引之者之引之者 河津信隆守

正月

大垣藩上河津信隆守

其藩中從之佐川信隆守

相定上守射為之及之者

字中より布告

天下の形勢不容易也合時之業を在坂之文教 徳川内府様
御上洛の儀に 仰付之去に之旨渡奉と出進之処に依り教奉之旨
起南の人教も同方之旨相併通之旨合にかりに上之
相欲之名難通事減之旨地之起りには然也奉之旨に對
相延の吳人等之旨是儀之旨通例之旨之旨奉之旨に對
御上洛 相延の事忠勤と成交致し奉之旨に對
以儀之旨儀之旨上之旨何れに用之旨に對 仰之旨其新之旨其旨
致之旨勤之旨一之旨為遠之旨其旨有之旨之旨其旨刑之旨

己酉十月

用人

内府公の奉圖書

- 一 薩藩奸黨之者之起也之旨
- 一 大事件之旨其儀之旨 仰付之旨去月之旨突然此之旨其旨奉之旨
以之旨其旨之旨仰 知之旨其旨之旨其旨之旨其旨之旨
- 一 之旨上御知沖之旨其旨 其旨之旨其旨之旨其旨之旨其旨之旨
其旨之旨其旨
- 一 私言之旨其旨之旨其旨之旨其旨之旨其旨之旨
- 一 九門之旨其旨之旨其旨之旨其旨之旨其旨之旨
官制迫之旨其旨之旨 相延大不教之旨
- 一 家来之旨其旨之旨其旨之旨其旨之旨其旨之旨
其旨之旨其旨之旨其旨之旨其旨之旨其旨之旨

内并左人射人数也其犯禁礼妨其他地及州郡之燒討知
盜及若能逐之哨方之半臣亦無能自去月方以事
伴之幸也亦亦也
補定之河真言令之松平修政
左支好長芸隆輝之出之志下之新之知結之江戸長崎中相
別之礼妨知盜及以以茂向中事自之留守より東西各
一 全國之礼之事業別紙之通之天人共之新情之
為之好長芸引渡之新情 涉河信之度第一之採用之
おぬ之不將止誅戮を加へて中之以臣儀之幸 奏す

正月

幕初制札

徳川慶喜天下之形勢を治己を事と改選上將軍儀辭退
お部之付動然と岁に脱任之存子と同列藩上座も之 作付
処豈國外大坂城に引取らるる縁事な御儀之去ル之者麾下者
を引奉一列へ同列 仰付の會事多と之御儀之關下を札之
奉りし御儀在彼之御儀を案し之を事と報快哨白始終事欺
朝廷の御大違に及之御儀不の進以上之於 朝廷御宿怨之
道も結果ふ之御儀進討 仰付の御儀事之御儀之御儀
誅戮子民塗炭之苦を御儀 敵意之御儀殺仁和寺
官証討將軍之御儀に付之御儀是之御儀急情之御儀或は御儀

在抱子或或械徒子彼以所看たりとも其悔心有田桑の園
亦不之忘之志有者官人々々其を以て法採用の事は其
此其に及り亦亦大義賊徒之福を以て或は隠居の事
相款日如處刑之而より人々此迄に及り及年
右通徒補送之 仰あり疑有者人々此迄に及り及年
既達也件

慶應四年

市橋下銘寺

一月七日の巻紙を執使南地の上向より此の久しき謗言を以て
之を宛てて其の縁に洛市信徒に別於尾寺中祈へ縁高

其意高きるる二日程其へ入山し由縁人教之人斗其志
以て之を宛てて其の縁に洛市信徒に別於尾寺中祈へ縁高
と云ふ此の向に此の縁に洛市信徒に別於尾寺中祈へ縁高
届中信徒の縁に洛市信徒に別於尾寺中祈へ縁高
市付市信徒の縁に洛市信徒に別於尾寺中祈へ縁高
以て之を宛てて其の縁に洛市信徒に別於尾寺中祈へ縁高
亦其の縁に洛市信徒に別於尾寺中祈へ縁高
新井信徒の縁に洛市信徒に別於尾寺中祈へ縁高
其縁に洛市信徒に別於尾寺中祈へ縁高
此縁に洛市信徒に別於尾寺中祈へ縁高

若流尾尾流流... 人好中人... 山本...

一 山本... 十台...

一 小原氏... 三台...

一 十台... 上橋...

一 河内府... 相延...

修村... 己方...

一 桑名... 初...

一 桑名... 入...

一 付...

一 郡上... 交...

天狗と云ふなる半鏡たの一を減らす事也
三年塞り大將軍の方よりひろを引く者古く勝利を得る
る一を減らす事也

右逆賊慶長を減らす事の理一と教るとはあはれ今を大
する事の成る事

神別と男子ふある事ハ逆の逆福の理を審く事速に進
退白地日と決す事也

正月十日

相延の爲に人情を交へ付冬より有へ正月十日

事の中交は大極意をなす事形勢を容易に察知仕 相延の事

為る事人教進を操り逢市と子教、如く因場を廻り其文を
修め引戻りし事と成けし上事もふりし事知れし事と成りし
仕りしは此の理をなす事也

正月十日

吉田 忠 子

相延の爲に進退の事也

天下の形勢を容易に察知し、之を以て強弱を知り、之を以て
形勢を察知し、人情を交へ、逢市に在る事也

相延の事、之を以て思ふ事、之を以て察知し、之を以て
向く、作事を知る事也

正月十日

吉田 忠 子

京師の事平の進達

宗也正の如き諸上宗の事平の如き諸府の事平の如き諸市の如き諸國の如き諸行の如き諸文の如き諸子の如き諸家
十一百出立十百入宗の如き諸府の如き諸市の如き諸國の如き諸行の如き諸文の如き諸子
の如き諸家

正月十日

戸田宗也正内

吉田宗也正

正親町三條殿下上内願書

諸の事平の如き諸府の如き諸市の如き諸國の如き諸行の如き諸文の如き諸子
の如き諸家
諸の事平の如き諸府の如き諸市の如き諸國の如き諸行の如き諸文の如き諸子
の如き諸家
諸の事平の如き諸府の如き諸市の如き諸國の如き諸行の如き諸文の如き諸子
の如き諸家

諸の事平の如き諸府の如き諸市の如き諸國の如き諸行の如き諸文の如き諸子
の如き諸家

諸の事平の如き諸府の如き諸市の如き諸國の如き諸行の如き諸文の如き諸子
の如き諸家

諸の事平の如き諸府の如き諸市の如き諸國の如き諸行の如き諸文の如き諸子
の如き諸家

諸の事平の如き諸府の如き諸市の如き諸國の如き諸行の如き諸文の如き諸子
の如き諸家

諸の事平の如き諸府の如き諸市の如き諸國の如き諸行の如き諸文の如き諸子
の如き諸家

諸の事平の如き諸府の如き諸市の如き諸國の如き諸行の如き諸文の如き諸子
の如き諸家

諸の事平の如き諸府の如き諸市の如き諸國の如き諸行の如き諸文の如き諸子
の如き諸家

正月十日

山本宗也正

正親町三條殿下

下願書

松平定直と友部内膳の書状
此書は松平定直が友部内膳に宛てた書状である。内容は、定直が内膳に命じた事項や、内膳の返答に関するものである。

正徳十一年

戸田重忠内
七月二十二日

正月十日 水戸城より友部内膳へ
此書は、水戸城から友部内膳へ宛てられた書状である。内容は、水戸城の状況や、内膳への指示に関するものである。

佐川 會津 赤松 高松 松山 備中松山

上総 下総 高力 斗部 戸田 松平 大久保 松平

平山 早川 設楽 佐藤 早川 松平 大久保 松平

大久保 松平 大久保 松平 大久保 松平 大久保 松平

大久保 松平 大久保 松平 大久保 松平 大久保 松平

大久保 松平 大久保 松平 大久保 松平 大久保 松平

大久保 松平

右今般度系に在りて 天祐及快哨自願、各知事等は、此書

付、仰あつたに、寺隨從了紙、佐五送取、松平定直

正 正 放 山 集

東海道 涉 渡 松

松平 少 将 柳 宗 侍 注

東山 尾 涉 渡 松

付 子 松 平 備 前

付 子 松 平 備 前

先命書之文

山陽山陽乃諸結抄

西園寺三位中将

討手

藤原 長房

後攻高松

討手

古佐

伊藤松山 傳中松山 日傳高松山

奉名

討手 肥後傳高松 傳中松山 日傳高松山 二之傳

軍律等先命書之文

西園寺右大臣源朝臣兼左大臣中納言藤原朝臣

源朝臣兼左大臣源朝臣兼左大臣中納言藤原朝臣

源朝臣兼左大臣源朝臣兼左大臣中納言藤原朝臣

山陽之在福守守伺主交守乃定之新及山陽向之義守

乃乃山陽之在福守守伺主交守乃定之新及山陽向之義守

是乃乃山陽之在福守守伺主交守乃定之新及山陽向之義守

乃乃山陽之在福守守伺主交守乃定之新及山陽向之義守

乃乃山陽之在福守守伺主交守乃定之新及山陽向之義守

乃乃山陽之在福守守伺主交守乃定之新及山陽向之義守

守中上之儀上

守中上之儀上

山陽二之傳

撤文の布告の義名先命書之文

謹而再之上は山陽守守伺主交守乃定之新及山陽向之義守

常向方之端少将方一定之而相傳之其年之民之口之
以結成之其然之平戈之用は其後を以て之通之其後
也一むと云ふ 濟重公孫之守一徳と云ふ周之迅速
相其之新改徳川成之始矣之哨主正之而撤文を以て同
此非之結成之むと云ふ布衣の奴隷と云く傳方と云く一統成徳
して 石室道之遺棄を以て而好意を以て之
勅使を以て向ふと云ふ法同と云ふ結成使を以て
向ふと云く結成を以て右の撤文を以て其年之始に付大
將軍御許に許す如新道之常向と云ふ之端も此の結成
の足込を以て湘山一白の宴合に於て公儀を以て得文を以て

少一定之上と上持し之遍く此布衣を以て其年之
与す其の徳に之を以て其年之始に付大

少の十之

少の二之

少入京少

新交を以て其年之始に付大將軍御許に許す如新道之常向と云ふ之端も此の結成の足込を以て湘山一白の宴合に於て公儀を以て得文を以て

少の十之

少の二之

少欲以て其年之始に付大

少欲以て其年之始に付大將軍御許に許す如新道之常向と云ふ之端も此の結成の足込を以て湘山一白の宴合に於て公儀を以て得文を以て

了寺何止四年

今斗斗用柳

三國八所

正月

山原二三志

諸國比以福面何書

王政修古了概一新行是之佳川氏何書

天相御領之入始也

附之了行何書内斗斗勢裁判可也

改元可也

改元可也

改元可也

内國斗斗勢裁判可也

今斗斗勢裁判可也

今度 朝廷共天地更始一新公明正大之 御政道
被為行候之付費用金先三百萬兩被為積置度御
主意之候依之京大坂ハ不申及無遠通富饒之者共
凋達為致是レラ因債トシ萬國普通ノ公道ヲ以テ
可及返辨決シテ後日ノ難治ニ不相成候ヤリ可取
討候間無懸念早ニ調金之儀會計事務裁判
所ハ可申出事

月日

岩倉右大臣

此度 官軍東山及以西奉向、付斗斗三糧斗斗斗斗費也

Handwritten text in vertical columns, likely bleed-through from the reverse side of the page. The text is faint and difficult to decipher.



